

朋友、宮本忠長と山の中の学校

早稲田大学教授 安東勝男

何年か前に宮本さんの作品を学校建築を中心に見てまわりました。市町村の単位で学校を設計する場合、かなり厳しい条件のもとでやらなくてはならない。市町村の場合、過去の学校の平均値で全体の面積を割り出していくんです。ですから、廊下を削って、教室を羅列して、階段と便所を削ると面積がなくなっちゃう。宮本さんはその中でずいぶんがんばってるなと思いました。限られた空間をととても豊かに創られている。例えばワークスペースを削ったりマルチパスの子供達が少しゆっくりできる空間を削ったりするため、廊下の長さをなるべく縮めてみたりいろいろな工夫をして面積をひねり出している。面積を一所懸命どっかから盗んできて自分なりの空間を削っている。しかも、全体を宮本調でまとめている。これには感心しました。それに建物が周囲の景観の中にすっぽりとおさまっている。信州で生れ育ち、その風景を知り尽くしているからこそできるんでしょう。また振り返った時とっても美しい。普段、子供達は自分の学校が周辺の景色とどんなふうに関わっているかなんてあまり気に留めません。でも下校時に門を出て振り返った時、自分の学校のどの辺にどんな山があったかということはかなり印象に残るんじゃないかな。宮本さんはそんな山や川を見せたいということを考えてデザインを決めているんだと思います。やはり、小学校、中学校時代をどんな景色の中で過ごしたかというのは人間の一生を支配するもので、宮本さんはそのことも考えて学校づくりに非常に意欲的に取り組んでいらっしゃる。

これは全部の作品に言えることですが、地方で仕事をする場合、依頼主からいろいろな要求が出される。東京でやるよりもっとたいへんです。それを十二分に満足させてかつ、宮本色を出している。とても難しいことを本当に真剣に、小さな住宅から大きなビルに至るまで細かく神経を使っておやりになっていて、ただ一地方で仕事をしているという以上のことをやっているんだなという気がしています。

使っている材料も実質的なものばかりです。たいへんなお金をかけてりっぱな材料を使ってやるんじゃないくて、その材料が長持ちするかとか、こういう場所に使うのかどうかとか、材料の本当の性質をかつちりつかんで決して無駄のない使い方をしている。そんな材料によって美しい建物を創っています。僕が、宮本建築が好きな

のは、その辺のところ。ただ、住宅に関しては、他の建物を創るときの彼の厳しさが薄れてしまうような気がする。人が良すぎるのか、依頼主の趣味や主張が出すぎて宮本色が後ろに隠れちゃうみたいです。住宅というのは依頼主が住むところであって、その人の考えでまとめられるのはしかたがないことなんだけれど、無責任な言い方をすると宮本さんの場合は、なんとなく妥協しすぎちゃうんじゃないかなと思います。

宮本さんは佐藤武夫先生のお弟子さんです。佐藤先生は、形を整理する、美しい形を創るということに信念をもって取り組んできた方です。その先生の意志を宮本さんも引き継いでいるんでしょう。それと、佐藤先生は日本に初めて建築音響学を導入した方で、アーキテクトであると同時に科学者でもあった方です。建築を科学的につかまえるということを最初にやりはじめた方だと思いますが、宮本さんもその体質を持っています。

ただ宮本さんは何となくモソモソしている。それに比べて佐藤先生は、映画の中で建築家であり大学の助教授という、こんなふうになるだろうというくらい、カッコがいいんだな。スマートで、ジェスチャーなんかも相当気どってて、黙ってても女性が寄ってくるような、ダンディーな人でしてね。宮本さんはその弟子なのに、ずいぶん違います。モソモソして、人が良くて、いつも真摯な態度をとっていて、だれをも尊敬してとてもいいに接する。おじぎもよくするし、びっくりするくらいいいねいなんだな。それはわかるし、好感をもてるんだけど、もう少し我をはってみても、もういいんじゃないかな。

僕は早稲田を昭和18年に卒業していますから7年くらい先輩になるのかな、ちょうど兄貴分みたいところですね。そんなこともあってずいぶん近いんです。デザインというのは学問じゃないから、お互いに気が合って、わかりあえないとだめでね。あまり歳が離れすぎちゃうとなかなかそうはいかないんだな。宮本さんとはいい話し相手、友だちとして長い間、お付き合いしています。で、あえて言わせてもらうと、宮本さんはまだ屈んでいるところがあると思う。俺はこれが好きなんだとか、俺はこれしかやりたくないんだという自分の我をパーと出してきても、もういいんじゃないかな、と思って居ます。(9月27日)